

「アウェアネス介助論」は2011年10月に発売されました。2011年11月にフランク・ハッチと話し合い、「伸展と屈曲」の定義は、「伸展とは前面が長くなり後面が短くなること。屈曲とは後面が長くなり前面が短くなること」としました。

従来の「伸展すると重さは(体の)下に行き、屈曲すると重さは(体の)上に行く」という表現は、「伸展と屈曲の特徴」としました。それに伴い、「アウェアネス介助論」の記述を変更することにしました。

「アウェアネス介助論」の1293ページ下段から以下のように修正します。

■誤解を避けるために

キネステティクスでは、「伸展と屈曲」という言葉を解剖学とは違う意味で使います。キネステティクスは「動きの言語化のツール」です。体の動的な変化を対象にしています。解剖学は体の部分が動いていないときの形、静的な状態を対象にしています。**解剖学の「伸展・屈曲」は関節の開きの程度を意味します。動きを示していません。キネステティクスの「伸展・屈曲」は各マスの動きを意味しています。全く違うことを意味しています。**

伸展の意味



図23-39 空を飛ぶときのマスの動き

「空を飛ぶ」と言われれば、図 23-39 のように四肢をいっぱい伸ばします。腰を反らし、胸を張り、頭を起こします。両生類では背面であった所にある筋肉が収縮しています。これらの筋肉の大半は伸筋です。

誤解を避けるために

図 23-40 に体の伸展させて空中を飛ぶときの各マスの変化を上図に示しました。

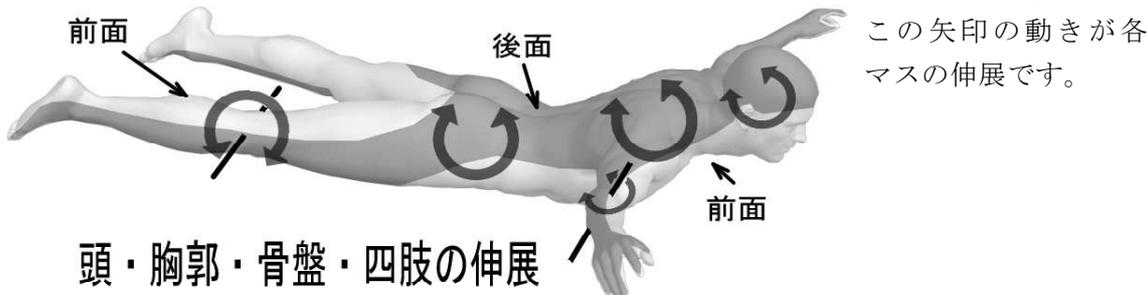


図23-40

マスとしての頭が伸展^{*1}すると頭の前面が長くなり後面が短くなります。マスとしての胸郭の伸展は俗に「胸を張る」という動きです。胸郭の前面が長くなり後面が短くなります。マスとしての骨盤の伸展でも骨盤の前面が長くなり後面が短くなります。マスとしての上肢の伸展でも上肢の前面が長くなり後面が短くなります。下肢については注意が必要です。キネステティクスでは下肢の後面は大腿骨の大転子から膝を通りスネの前から足の

*1 「マスとしての頭」「マスとしての胸郭」「マスとしての骨盤」は解剖学で頭と呼ばれる部分とは違います。厳密な境界を持ちません。感覚的に理解されます。

伸展の意味

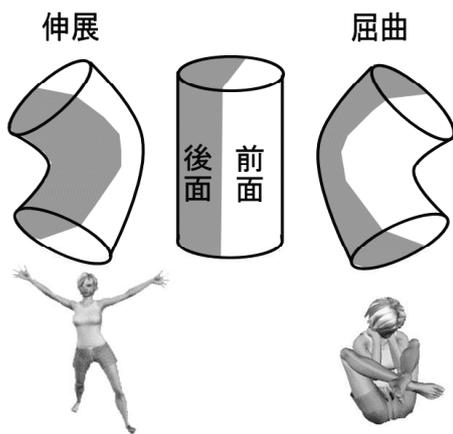


図23-41

甲になります。両生類では背側と呼ばれる部分です。ですから、キネステティクスの前面・後面という概念を使って表現すると、マスとしての下肢の伸展でも、やはり前面が長くなり後面が短くなります。つまり、キネステティクスの前面・後面という概念を使うと、すべてのマスについて「伸展とは前面が長くなり後面が短くなる動き」と定義できます。屈曲は伸展の逆ですから、「前面が短くなり後面が長くなる動き」です。

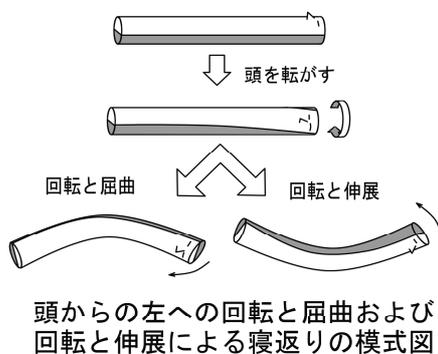


図23-42

キネステティクスの伸展という言葉を使うと、伸展による寝返りは、「いずれのマスから開始してもすべてのマスに右への回転と伸展が伝われば、右に寝返りし、すべてのマスに左の回転と伸展が伝われば左に寝返りする」と表現できます(図23-42)*1。また、股関節の屈曲による寝返りは、「骨盤と下肢のマス

を右に回転と屈曲させて、胸郭と頭のマスに回転が伝わると、右に寝返りし、左の回転と屈曲が伝わると左に寝返りする」と表現できます。「下肢」と「骨盤」を「上肢」と「胸郭」にかえると、「胸郭と上肢のマス

ポイント

キネステティクスの「伸展・屈曲」という用語は、マスの「動き」を表しています。解剖学の伸展・屈曲は、関節の角度の増減、つまりマスとマスの位置関係を表しています。

*1 キネステティクスの伸展も屈曲もマスの動きを示しています。体全体を伸展し続けると体は背中側に反ります。まっすぐな鉄棒を反らせると転がらなくなります。同じように体を反らせると回らなくなります。転がって横向きになり安定します。つまり、腹側に屈曲しても背側に伸展し続けても側臥位になります。